

鉄鏃に伴う鹿角製装具及び鳴鏑について

— 金井東裏遺跡出土鉄鏃に伴う鹿角製装具の検討 —

杉 山 秀 宏

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の研究史

2. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の形式

3. 鹿角製鏃装具

4. 鳴鏑

5. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の分布

6. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の編年

まとめ

— 要 旨 —

本稿は、金井東裏遺跡より出土した鹿角製装具が装着された矢について理解を深めるために、その類例を集成し、合わせて同じ鹿角で製作されることが多い鳴鏑についても集成を行い、両方の遺物の位置づけを行うものである。両者ともに、外に向って見せるものと聞かせるもので、外部に対するアピールを意識した遺物であり、その共通性から両者を比較しながら検討した。

その結果、現在、両者ともに前期に遡る例は無く、5世紀に入って朝鮮半島との関わりが想定される古墳や遺跡から出土する例が多いことが分かった。さらに、限定された本数で特定の鏃と共伴することが多く、鹿角製装具・鳴鏑を有する矢は極めて特殊なものであることが分かった。特に、鳴鏑は、北東アジアを起源にして、朝鮮半島を経由して渡来人が関わって日本に伝えられたものと想定している。その中で、金井東裏遺跡は、朝鮮半島との関係が想定される提灯などの遺物が遺跡から出土していることから、渡来人との関係が考慮されるものである。ただし、鹿角製鏃装具については、峯ヶ塚古墳例のように、直弧文を施す例もあり、在来の文化的要素を保持しているものである。また、普通は限られた鏃に伴って少数の本数しか鹿角製装具を伴わないのに、金井東裏遺跡例では、出土した20数本の鏃のほとんどに鹿角製装具が装着されている。この他例と比べての特異さは、金井東裏遺跡の鹿角製鏃装具を持つ鹿角装矢に重要な意味があることを示しているものと想定した。

キーワード

対象時代 古墳時代

対象地域 全国

研究対象 鹿角製鏃装具・鳴鏑

はじめに

小札甲を着たまま火砕流で被災した人物が発見されるなど、古墳時代の火砕流による被災遺跡である金井東裏遺跡からは、小札甲の1号甲を着た人物と単独で出土した小札甲の2号甲の間に、東に切っ先を向けて20数本の鉄鏃が出土した。火砕流が西から東に向けて流れてきたことを考えると、矢先を上にして矢入れ具に入れた矢一式が、火砕流により倒れて、矢先を東に向けて流された状況が想定される。

この鉄鏃群を観察した結果、そのほとんどの関下の莖上端部に鹿角製¹⁾と考えられる装具を取り付けたものであることが、肉眼とX線撮影により確認できた。まだ、鉄鏃全体の詳細な観察ができていないため、すべての鉄鏃について鹿角製の装具があると断定はできないが、その可能性は高い。

さて、金井東裏遺跡から出土した様々な遺物には、重要なもの・特徴的なものが多い。それらの遺物の理解のために、継続的に類例を調査し、それら遺物についての研究、発表をしていくことで、金井東裏遺跡の理解につなげるという形を事業団の方針として取るようになった。

そこで、これまであまり類例を聞かない冒頭に記した鉄鏃の鹿角製装具(鹿角製鏃装具)²⁾についてその類例調査を行い、その位置づけを行うとともに、外に向かって見せることを目的とした鹿角製装具に対して、同じ鹿角製の装具であるが、鳴らすことにより、外に向かって聞かせることを目的とした鳴鏑についても、外にむかってアピールするという共通性があることから、その類例を調査し、位置づけを行うものである。なお、鳴鏑は構造比較のために木製のものも調査に含める。

以下、鹿角製鏃装具・鳴鏑の研究史をたどり、次に鹿角製鏃装具・鳴鏑の順に形態などから見た形式区分を行う。そして、鹿角製鏃装具・鳴鏑それぞれの個々の出土例について古墳時代を中心としながら、参考に奈良時代以降の例も紹介しつつ、概略を述べる。最後に分布と編年について略述し、鹿角製鏃装具・鳴鏑の位置づけを行う。以上の成果をもとにして、金井東裏遺跡出土鹿角装矢についてその性格に迫るものである。

1. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の研究史

鹿角製鏃装具については、管見によると、明瞭に判明した例は峯ヶ塚古墳の例があるのみである(吉澤・下山2002)。報告書中では、鹿角製装具と、さらに鹿角製装具に被せるように金属製装具があることも記述されており、金属製装具・鹿角製装具ともかなり残りの状態が悪い中での報告例として貴重である。

鈴木一有は、特殊鉄鏃の反刃鏃について検討する中で、峯ヶ塚古墳の鹿角製装具について触れ、赤色顔料で塗ら

れ、直弧文の文様があることで、儀仗用の特殊化した矢であったことがうかがえると述べている(鈴木2003)。

鳴鏑の研究は、出土数が少ないこともあり、あまり盛んではない。以下、古墳時代の鳴鏑を中心に、一部奈良時代以降のものや東アジアのものも含めて研究史を簡単にたどる。

古く、柴田常恵により内裏塚古墳出土の遺物報告の中で紹介されている(柴田1906)。その中では、正倉院御物鳴鏑矢との比較をしている。特に、3個の円孔を有する通例の鳴鏑9個(第2図-1・2、第3図-1～4)の出土以外に、円孔の無い鹿角製装具の可能性の高いもの(第3図-5)が数個出土したことを記したことは、鹿角製装具との関係から重要である。

朝鮮半島の例として、新羅の6世紀前半の梁山夫婦塚の調査報告書(馬場・小川1927)の中で、17本出土した鉄鏃中、三翼鏃と平根腸挟長三角形鏃2本に鳴鏑が装着されていたことが報告された。朝鮮半島初出の例である。報告者は記紀の例を引用して、日本にも鳴鏑があり、北方胡民族の武器で北方から朝鮮・日本ともに輸入した可能性について言及している。

鉄鏃全般について、広汎に論を展開したのが、後藤守一である。鳴鏑についても、古墳時代の鉄鏃について検討するなかで、奈良正倉院宝物例他・朝鮮出土の鏃について指摘している(後藤守1939)。鳴鏑は、奈良正倉院宝物例(3例)を中心として、法隆寺献納宝物例(1例)・般若寺蔵品例(1例)・春日神社蔵品例(3例)の計8例をあげて、上差矢として、一種の神聖観を以て取り扱われたとした。朝鮮出土の鳴鏑については、夫婦塚出土の2例の図を紹介しているのみで、具体的な記述は無い。

後藤はさらに、正倉院の御物矢を紹介する中で、鳴鏑について言及している(後藤守1940)。正倉院宝物例(9例)以外に法隆寺献納宝物例(1例)・春日神社蔵品例(4例)の計14例の鳴鏑の図をあげている。その中で、鳴鏑には、球形のものと頭長のものの2種があること。球形のものが普通であるが、法隆寺献納宝物例や春日神社蔵品例からすると頭長の類例もあることを述べている。材料は鹿角か牛角で、穿孔数は4・6・8個があることも記している。さらに鏑の名は記紀に見えていることを紹介し、献物帳には、哮と記してあり、牛角・鹿角・木哮があるとするが、御物には木製がないこと、又、色彩は碧哮・赤哮・白哮があるとするが、碧・赤等彩色のものはないこと、さらに鹿角撥鏑のものもありとあるが、実際には撥鏑装飾のものは無いとしている。奈良時代以降の当時知られていた伝世品について網羅集成しており、現在それらを詳細に観察することができない状況において、後藤の研究は非常に重要である。

末永雅雄は、古代の体系的な武器研究の中で、弓矢を扱う中で、鳴鏑も取り上げた(末永1941)。内裏塚古墳

例を取り上げ、4孔あるものと、無孔のものを取り上げているが、無孔のものが、音響を発しないことに対して鳴鐃としてよいか懸念を示している。また、法隆寺・正倉院・般若寺等に伝えられる鳴鐃と記紀の記述から鳴鐃が音響を発する矢であることを物語るとしている。東大寺献物帳から後藤が述べたような、材質と彩色のことについても触れている。また、鳴鐃に雁股鍔と組み合わせられることが多いことを中世の武家までも伝統として伝えていることも併せて記している。増補版では、鳴鐃の例として七廻鏡塚例を取り上げている(末永1981)。

江上波夫は、匈奴研究の中で、鳴鐃を取り上げた(江上1951)。史記の匈奴伝の中に、匈奴の冒頓が、鳴鐃を作り、その騎射を習得したことを初め、いくつかの記述があり、鳴鐃は匈奴の独特な精鋭な武器であり、その強大な軍事力の代名詞のようになっていたことを述べている。また、東アジア全体の中で鳴鐃の形式区分を行い、大きく2形式に分けた。鍔身部と鳴響部が個別の2部からなり、箭幹を通して連結した形式のものと、鍔身部と鳴響部が一個体をなしているものとである。前者は、東アジア全般(シベリア・中国吉林省・内蒙古・韓国・日本)に長く使用されているもので、後者は、綏遠地方から特徴的に出土する青銅製のものとした。匈奴の鳴鐃は、後者の青銅製の一体型のものから、前者の2部のものに変化していくことを示した。さらに、鳴鐃が北アジア・東北アジアの諸民族に使用されたことを、アルタイ地方の突厥の出土品や、高句麗壁画の鳴鐃図、満州出土の鳴鐃、韓国慶尚南道梁山夫婦塚出土の例などから述べ、北アジアの遊牧騎馬民族固有の武器で、彼らの間に信号用として発達した特殊な箭鍔に他ならず、中国・満州・朝鮮を経て日本へ伝わったことを記した。鳴鐃を東アジア全体から取り上げた論考として重要である。

日本初の木製鳴鐃が良好な状態で出土した七廻鏡塚古墳の報告書(大和久1974)では、木製鳴鐃の詳細な報告がなされている。木製と竹製の篋の2種類の篋が装着されており、篋との装着法についても貴重な情報が得られた。また、この時までには日本国内で発見された古墳時代鳴鐃を総覧して、孔数が2か3個のものがあること、初現は5世紀に入ってからであることなどを述べている。

梶山林継は、内裏塚古墳出土の鳴鐃のうち、所蔵品3例について詳述するとともに、古墳時代の他遺跡出土の鳴鐃を集成し詳細に紹介している(梶山1991)。古墳時代の鳴鐃を集成し、考察した初めての論考である。その中で、古墳時代の鳴鐃には、3孔のものが多く、後に正倉院御物矢例のように孔が増えて8孔となり、八目鐃となっていくこと、鹿角製と木製があり、イチジク形をしたものが多かったこと、大型鍔が取り付けられていたことなどを指摘している。

以上、研究史を辿ってみて分かったのは、鹿角製鍔装

具については、出土例が少ないこともありほとんど研究がなされていないということである。まずは、類例を集成・検討していく必要がある。

鳴鐃の研究もまだ浅く、今後は現在出土している類例の集成・検討と鳴鐃の起源と考えられる北東アジア全体を見据えた研究が必要となるであろう。

2. 鹿角製鍔装具と鳴鐃の形式

鹿角製鍔装具は、その形態は、基本的には、球形あるいは円筒形に近い形態である。構造的に大きく2つに分かれる。上部にキャップ状の金属製の装具を笠状に付けているものと、単独のもの2つである。前者は、峯ヶ塚古墳例(第1図-3~5)がある。笠状の金属製装具以外は、基本的に鹿角製と考えられる。

笠状部がつかない単独例は金井東裏遺跡例(第1図-1・2)で、球形に近い形態である。築瀬二子塚古墳例(第1図-6・7、10~12)・少林山台12号古墳例(第1図-8・9)は、鍔がひどく、その材質を特定できない。

鹿角製鍔装具の形式細分は、残りの悪いものや錆びがひどいものが多く細部の形態を確認できないため、現状ではできない。

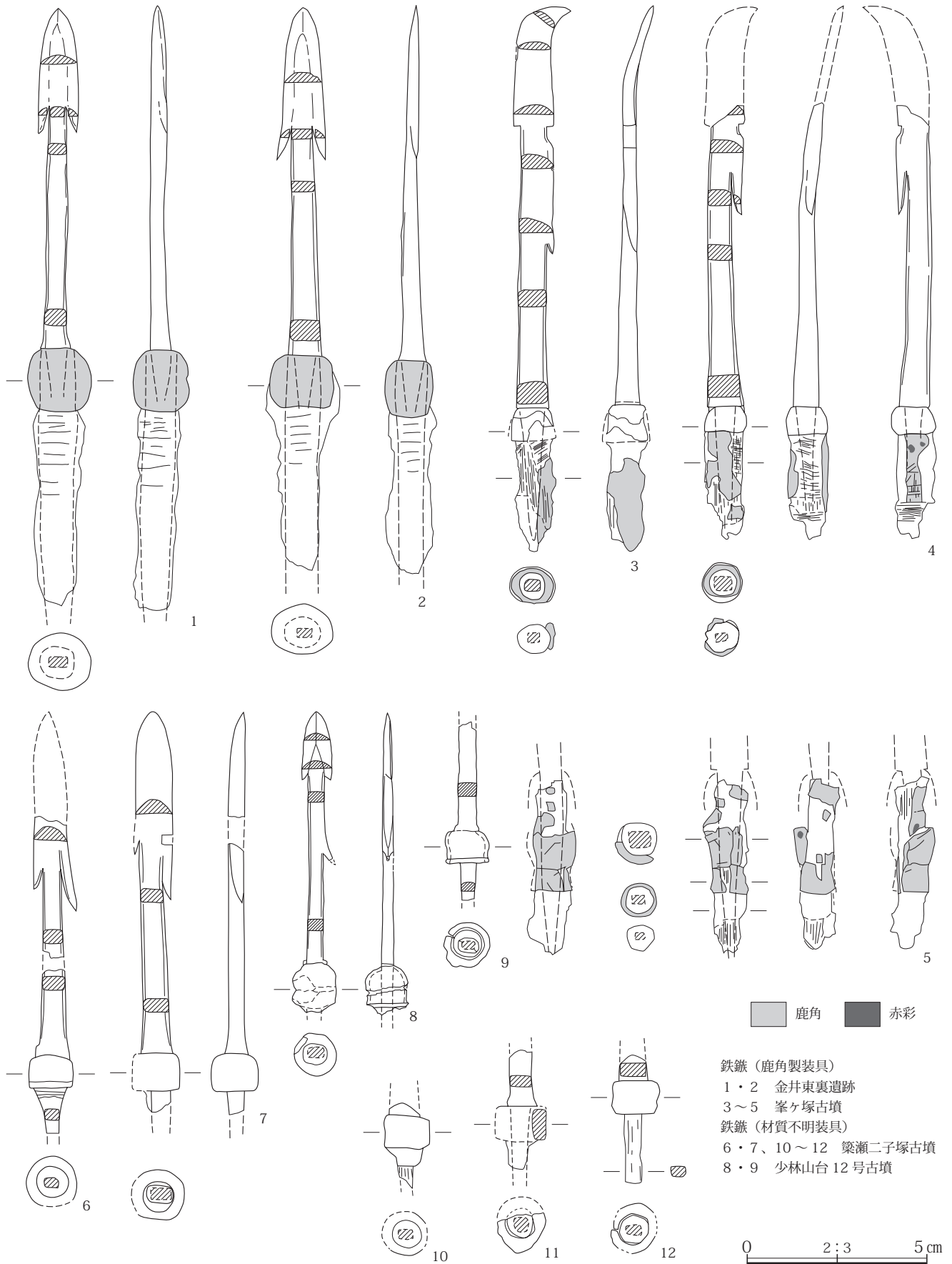
鳴鐃は材質に木(第4図-1~7)・鹿角の2種が、古墳時代では確認できる。木・鹿角の素材ともに、組み合わせ技法のものは無い。基本の形は、中央に、鍔・篋に装着するための、頂部から縦の孔が大きく開けられ、肩部を中心に、音を発するための小孔(目)³⁾が、空気が入りやすいように斜め上方から、複数個穿孔されている。鍔・篋に装着するために口縁部・底部がすぼまる形で、そこに段差や溝を設けることもある。

外形としては、膨らみが、肩部のやや上部にあるもの(第4図-1~8、第5図-3)と、腹部にかけてやや下膨れ状のイチジク形に近似するもの(第2図-1・2、第3図-1~4、第4図-9・10、第5図-1・2・4~7、第6図-7・8・10)と球形状のもの(第6図-1~6、9)の大きく3つに分かれる。うち、球形状のものは今の所、奈良時代が中心となるので、古墳時代の鳴鐃の区分では必要ない可能性が高い。

肩部のやや上部に膨らみのあるタイプと、腹部にかけて下膨れ状のタイプの2つの形態それぞれに大きく有段と無段のものに分けられる。

木製のものは、膨らみが肩部のやや上部にあるタイプが中心で、無段のもの(第4図-1・2・5・6)が多いが、一部下部に有段のもの(第4図-3・4・7)がある。

鹿角製のものは、2つのタイプが両方あり、肩部に膨らみのあるものは、無段のもの(第4図-8、第5図-3)である。イチジク形のものは、有段のもの(第2図-1・2、第3図-1~4、第4図-9・10、第5図-2)が圧倒的に多い。有段のものの中には、さらに、笠状に張り出す



第1図 鉄鏃(鹿角製装具・材質不明装具)図

もの(第4図-9)・下部に段のあるもの(第5図-1)がある。

以上、まだ個体数が少ない段階なので、細かな形式区分は行わず、おおよその傾向を押さえておくのみとする。

鏃との共伴は、古墳時代にははっきり分かっているのは、浅間神社西側5号横穴例(第5図-1)のみである。吉井城山横穴例(第5図-2)も装着していた可能性がある。それ以外は、すべて単独出土か、七廻り鏡塚古墳例のように矢先に装着する形態であり、古墳時代の鳴鏑の装着法について考える必要がある。

3. 鹿角製鏃装具

鉄鏃の鹿角製装具については、管見によれば、確実な例は、金井東裏遺跡例と、峯ヶ塚古墳例合わせて2例のみである。ただ、装着方法は不明だが鳴鏑ではなく鹿角製装具の可能性があるものが内裏塚古墳に1例(第3図-5)ある。また、鉄鏃により、材質不明であるが、関下に装具が付くものが、群馬県内に2例ある。鹿角製で無い可能性が高いが、関下に付ける装具ということで関連資料として紹介する。内裏塚例については、鏃の関下に装着された状況で出土していないことなど、鹿角製装具としてははっきりと区分できないので、鳴鏑の中で紹介することにする。

① 金井東裏遺跡例(群馬県渋川市)(第1図-1・2)(杉山秀・桜岡ほか2014)

金井東裏遺跡例からは、先述したように、小札甲である1号甲を着た人物と、同じく小札甲の2号甲の間から、切先を皆東に向けて、鉄鏃が20数本出土した。火砕流は西から東に向けて流れたので、鏃は切先を上に向けて置いていたものが火砕流により東に倒れたものと考えている。

装具は鹿角製と考えられ、球形から円筒形の外形を有する。長頸腸挟長三角形鏃の関下に装着されている。鉄鏃で覆われているものが多く、肉眼では、一部のみしか確認できないが、X線写真で確認できるので、ほとんどの鏃に鹿角製装具があった可能性が高い。鹿角製装具には穿孔(目)は無く、鳴鏑で無いことは明瞭である。

鹿角製装具は、関下に位置し、関が押さえとなっているものであろう。肉眼やX線写真で確認できたわけではないが、他の鹿角製装具や鳴鏑の諸例からすると、鹿角製装具を篋の上に被せて、篋を装具とともに茎に差し込んで、関の段差で上の押さえをした後、装具の下の押さえは樹皮を巻くなどして鹿角製装具を固定させているものと考えている。

注意したいのは、鹿角製装具を持つ鏃も、鳴鏑も、通常全体の鏃の中のうち、ごく一部のもののみ装備しているのに、この金井東裏例では、出土したほとんどの鏃にこの鹿角製装具が付いていることで、当例の特異性が浮

かび上がる。

この遺跡からは、提低・小型農工具・鍛冶素材としての鉄素材・馬蹄跡などの朝鮮半島系の遺物や遺構が多く検出されている。6世紀初頭に比定される。⁴⁾

② 峯ヶ塚古墳例(大阪府羽曳野市)(第1図-3~5)(吉澤・下山2002)

峯ヶ塚古墳は、古市古墳群中の全長96mの前方後円墳である。ここから、長頸独立片逆刺反刃鏃の関下に金属製の装具を上被せた鹿角製装具が3点出土している。いずれも残りが悪く、特に鹿角部は本来の形態が分かりづらい。キャップ状に製鹿角装具を被せる金属製装具は3例中、2例(第1図-3・4)に遺存しており、緑青と金のメッキ片がかすかに残り、金銅製装具である可能性が高い。

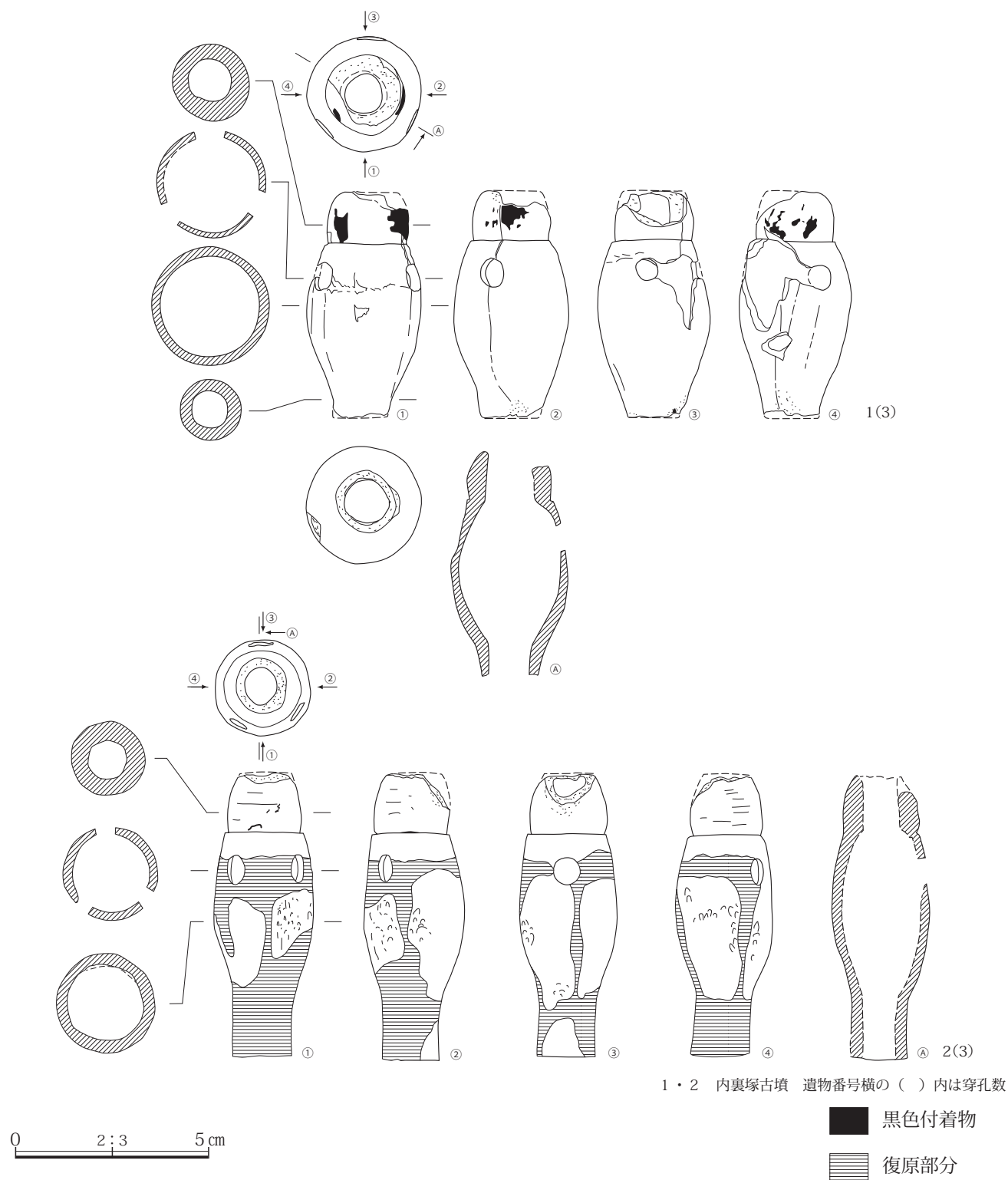
いずれにしても、金属製のキャップ状のものを鹿角製装具に被せる形で、鏃に装着している。鹿角製装具及び篋は、金属製装具の内側まで入っていることは、3例目(第1図-5)から確認することができた。篋の外側に鹿角製装具を被せ、さらに金属製のキャップを被せて、関に当てるようにして固定させているのである。

鹿角製装具は、(第1図-4)では、直線状に延びた形態のものである可能性がある。ただし、遺存度が悪く断定はできない。(第1図-5)を観察すると、金属製のキャップは無いが、かつてあったと思われる個所から、鹿角製装具が球形状にやや膨らみを持った後、すぼまるような形で篋に至る形態を取っていたと考えてよいものである。もう1点の(第1図-3)は、残りが悪く、本来の鹿角製装具の形は確認できない。また、赤色顔料が塗られ、直弧文かとも思われる文様のごく一部で確認(第1図-4・5)できるが、残りが悪く文様構成などは分からない。

以上、峯ヶ塚古墳では、鹿角製装具が3例、日本国内で初めて確認できたもので、金属製装具も鹿角製装具の頭部を被せるような形で出てきている。この金属・鹿角製装具を有する鏃は、峯ヶ塚古墳の出土鏃群の中でも特殊な、長頸独立片逆刺反刃鏃に装着されていることは注目してよい。反刃鏃については、前述したようにその特殊性について注目されており(鈴木2003)、そのような特殊な鏃にこの装具が付いていることの意味は大きい。また、反刃鏃のこの装具を付けている鏃の刃先がともに屈曲していることも注意すべきである。⁵⁾また、このような特殊な鏃が、古市古墳群中の峯ヶ塚古墳から出土していることに意味がある。

この古墳からは、冠帽・帯金具・垂飾付耳飾り・握り挟など多くの朝鮮半島系遺物が出土している。5世紀末~6世紀初頭に比定される。

③ 築瀬二子塚古墳例(群馬県安中市)(第1図-6・7、10~12)(大工原・志村ほか2003)



第2図 鳴鐃図(1)

築瀬二子塚古墳は群馬県の初期の横穴式石室を持つ全長80mの前方後円墳である。その石室内から、短頸段違腸袂長三角形鏃の関下にキャップ状の鉄錆で覆われた装具が付いているものが出土している。刃部とともに確認できるのは2本のみ(第1図-6・7)で、残り4本は刃部のみである。刃部が確認できないが、鉄錆で覆われ

たキャップ状装具と思われるものが確認できるのが3本(第1図-10～12)ある。確実に装具と認定できるのは合計5本となる。

キャップ状のものは、鉄錆で覆われていて、本来の材質ははっきりしない。可能性として樹皮状のもので巻いたような痕跡が見える箇所もあるが、分析を行うまでは、

材質については保留しておきたい。

明治12年という古い時期の開口により、副葬状況や副葬本数の正確な数も分からない状況である。鏃の形式としては、装具を付けた短頸段違腸挟長三角形鏃が向かって右側に逆刺が長く伸びるのに対して、向かって左側に長く伸びる形態の鏃が3本、短頸腸挟三角形鏃3本、極端に厚みが無く薄手で軽量の鏃形模造品と考えている短頸長三角形鏃9本がある。これら3形式の鏃には、キャップ状装具は付かないと想定される。峯ヶ塚古墳と同様に特定の鏃形式にのみ装具を装着していることが分かる。

この古墳は、初現期の横穴式石室であり、遺物には、垂飾り付耳飾りや金層ガラス玉など朝鮮半島系遺物が入っている。6世紀初頭に比定される。

④ 少林山台12号古墳例(群馬県高崎市)(第1図-8・9)
(飯塚・徳江1993)

袖無型の横穴式石室を持つ径11mの円墳で、短頸独立片逆刺腸挟長三角形鏃の関下に、築瀬二子塚と同じような鉄錆で覆われたキャップ状の装具を持つ例が出土している。今の所、刃部とともに確認したのは1例(第1図-8)のみで、装具のみを、頸・茎とともに確認したのは1例(第1図-9)の計2例である。キャップ状にふくらを持った後に、少しすぼみ、下端に鰐状に出る部分がある。いずれも鉄錆で覆われて本来の材質が不明である。ただ、内面を見ると、樹皮状のものを数回巻いたような状況が一部観察でき、有機質のものを漆等で固めたものが、その後、鉄錆で覆われた可能性もある。材質については、築瀬二子塚古墳同様判断を保留したい。いずれにしても篋の上にキャップ状の装具を被せた形態は前の3例と同じである。また、棘状関の可能性の高い関があり、この時期としては異例である。また、独立片逆刺の鏃もやはり関義則らが指摘している(関義1991、鈴木2003)ように特殊な鏃で、この鏃にキャップ状の装具が付くことは興味深い。長頸三角形鏃やおそらく長頸と考えられる腸挟長三角形鏃なども出土しているが、これらは角関(一部には棘状関を持つ可能性あり)で、いずれも装具は付かないものである。築瀬二子塚同様、特定の鏃にのみキャップ状の装具を付けているのである。

この古墳は、小型古墳に初現期の横穴式石室を採用したものであり、6世紀前半に比定される。

以上、鏃の関下に装着される、鹿角製装具及び金属製装具と鹿角装具、鉄錆で覆われた材質不明の装具について紹介した。これを見ると、特徴的なことが5つある。以下まとめてみる。

- ① いずれも時期的には5世紀末から6世紀前半の間に収まるという年代的に特定されること。
- ② 全ての例では無いが、基本的に特定の鏃に少数例装具が付くことである。鏃の中から特殊な鏃を選択し、

そして数も限定して装着していることが分かる。唯一例外は金井東裏遺跡例で、すべての鏃を詳細に検討した訳では無いが、20数本のほとんどの鏃に鹿角製装具を装着しているという状況である。

- ③ 基本的には関下に位置し、関の段差を生かして上の押さえとし、篋は、装具の中に取り込み、装具下を固定させるのに樹皮巻を行う例がある。
- ④ 朝鮮半島系の遺物が共伴する例が多く、半島との関わりが想定される古墳・遺構から出土している場合が多い。
- ⑤ 一部に直弧文を持つなど、日本在来の文化的要素を含む例があり、日本独自の要素を保持している。

以上5つが、特徴として挙げられる。つまり、5世紀末から6世紀前半にかけての朝鮮半島との関わりがある古墳や遺構から出土していることが多いが、日本在来の直弧文を持つものなどがあるなど、在来の文化的要素を保持しているものである。金井東裏遺跡例以外は、装具を備えた鏃形式も特殊で、本数も限定された極めて特徴的な遺物であるということが分かった。

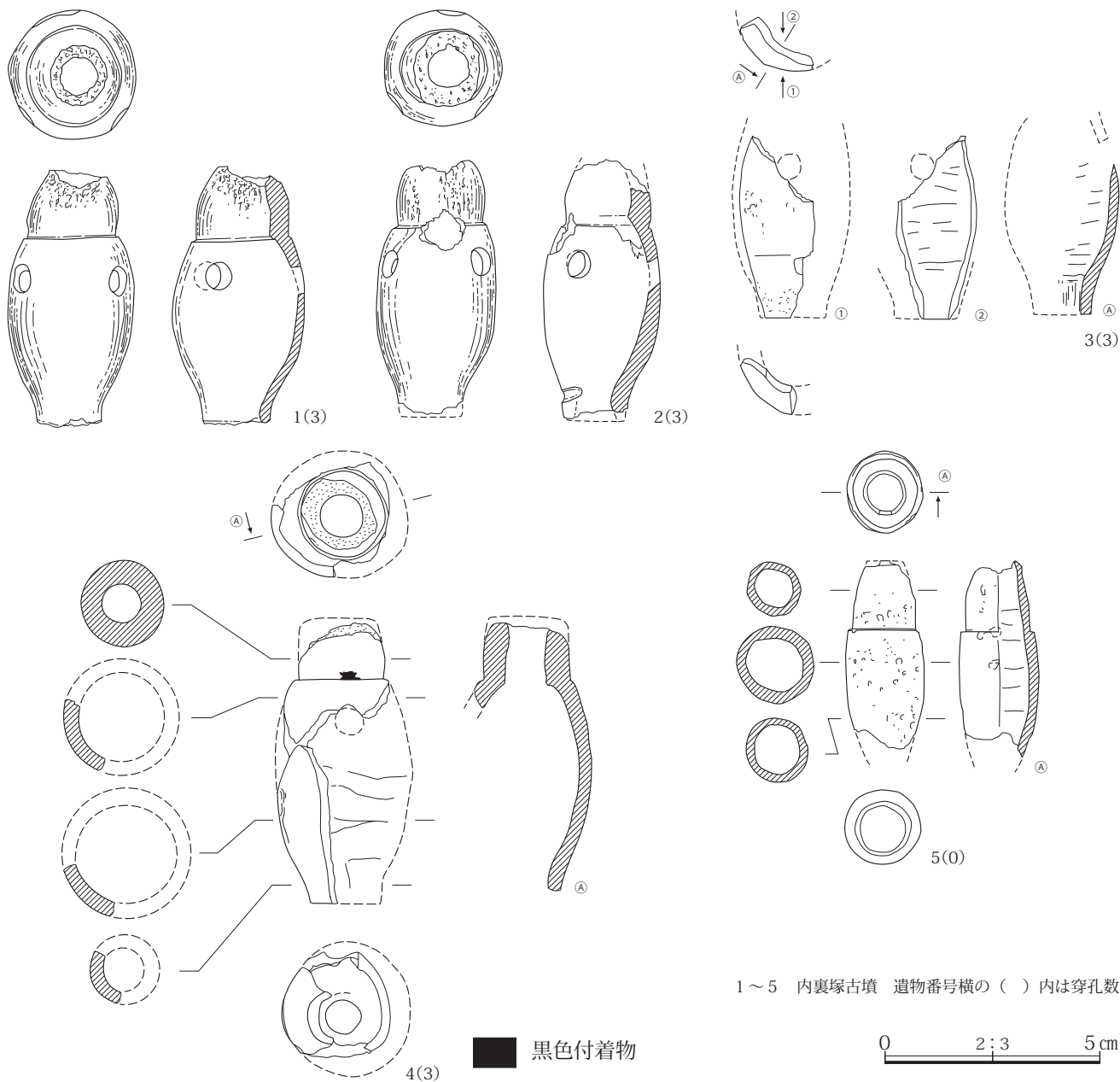
4. 鳴鏑

① 内裏塚古墳例(千葉県富津市)(第2図-1・2、第3図-1～5)(柴田1906・杉山晋1975・梶山1991)

内裏塚古墳は全長144mの大前方後円墳で、後円部に2つの主体部がある。鳴鏑は、その西方の乙石室より出土している。鹿角製鳴鏑は、鉄鏃の横に別にまとめて9個置いてあり、さらに、矢短に附すもの(第3図-5)が数個一緒に置いてあったとの記述がある。鉄鏃と分かれて単独で置かれていたことが分かる例である。

鳴鏑は、大型有段有孔(目)のものと小型有段無孔(目)のものがあり、先ほどの配置状況のときの9個まとめて置いてあるのが大型有孔(目)のもので、それと一緒に数個置いてあった矢短に附すものが小型無孔(目)のものである。大型のものは、9個あるとなっているが、現在確認できるのは6個である。⁶⁾

大型有孔(目)のもの(第2図-1・2、第3図-1～4)は通有の鳴鏑の有段タイプのものである。長さは5.8cmから7.3cmであるが、復元をしているものがあり、少し短くなる可能性もある。6cm前後の大きさが標準であろう。もう1例は、小型無孔(目)のもの(第3図-5)で、鳴鏑ではなく、装具となる可能性がある。長4.3cm以上の有段のもので、共伴する鳴鏑と形態は極めて近いがやや細長いのが特徴であり、孔は頂部から縦に1孔あるのみである。いずれも顆粒痕跡が表面に少し残り、内部には、横方向のケズリ痕跡が残っている。また、黒色の付着物が口縁部の段部や底部の一部に認められる。矢や鏃と装着する際の漆の可能性もある。



第3図 鳴鏑図(2)

鳴鏑は、鏃と別々にまとめて置いてあり、いずれも鏃と相伴していないことなどから、鉄鏃とセットでは無い可能性が高い。ただ、相伴していた鉄鏃と分離させて副葬したという可能性もある。あるいは、本来単独で使用して七廻鏡塚例のように矢の先頭に装着していたものを副葬し、矢部分が腐朽したのか、単独で鳴鏑のみ置いていたかである。今の所、矢先部分に装着したものと考えておきたい。というのは、後ほど述べる古墳時代出土例のうち、そのほとんどが、単独出土で、しかも鉄鏃の痕跡などが無く、鏃と相伴していたとは考えられないからである。

この古墳は、千葉県下最大の前方後円墳であり、前方

後円墳11基を含む総数41基の大古墳群である内裏塚古墳群の最初に築かれた古墳でもある。甲・乙の2石室があり、武器と農工具が中心だが、特に初期の胡録金具は朝鮮半島からの渡来品と想定され注目される。5世紀中頃前半に比定される。

② 南郷大東遺跡例(奈良県御所市)(第4図-2)(青柳 2003)

導水施設のある遺構の廃絶後、人工河川の可能性のあるSX01に形成された埋土上層より出土している。

鳴鏑に類似した形態で、最大径が上方にある卵形を示し、カエデ属カエデ科に属する木製品である。縦方向の径0.6cmの穴は貫通しているが、体部に円孔(目)は無い。

鳴鏑の未製品や木製鏃装具の可能性もある。

この遺跡からは多くの韓式系土器が出土している。南郷遺跡群全体としては、葛城氏の本拠地として、居館・祭儀場・武器生産工房・集落・墓地などが明らかになった遺跡群であり、韓式系土器・鍛冶遺構・鍛冶関連遺物・大壁建物・オンドルなど様々な渡来人との関わりが想定される遺跡である。5世紀後半に比定される。

③ 布留遺跡例(奈良県天理市)(第4図-1)(山内・置田 1995)

布留遺跡三島(里中)地区の東地区流路上層より出土している。

鳴鏑は木製で樹種は不明。肩部に膨らみを有するタイプで、縦方向に半分欠失して、遺存度は1/2である。頂部から1個の縦の円孔と、最大径よりやや上部に3個の孔(目)がある。

この遺跡からは、韓式系土器や、大量の鉄滓・刃口などの鍛冶に係る遺物と、木製の鞘や把頭などの刀剣装具も数多く出土し、渡来系の工人が関わった、物部氏が管轄する武器工房があったと考えられている。5世紀後半から6世紀に比定される。

④ 磯間岩陰洞窟墓例(和歌山県田辺市)(第4図-8・9)(堅田1970・堅田 1987・田中 2008・中川 2008)

磯間岩陰は、海岸沿いにある海蝕洞窟を利用した洞窟の墓所である。鹿角製品の出土が極めて多い特徴的な遺跡である。

奥壁沿いの中央部にある1号石室の中から、成人骨・幼児骨・鹿角装剣・鉄鏃・鉄鏃・鉄鏃・鹿角製鈎・鹿角製鈎針などとともに、無段形の肩部に膨らみを有するタイプのほぼ完形品の2孔(目)を有する鳴鏑(第4図-8)が出土している。上から見るとやや楕円形状を呈している。表面の顆粒が一部残っている。表面下部に横方向の研磨痕跡が認められる。5世紀中頃に比定される。

3号石室からは、成人男性2体と、鹿角製刀子・弭(ゆはず)形鹿角製品・鉄鏃・砥石などとともに、有段型の笠状部を有する完形の3孔(目)を有する鳴鏑(第4図-9)が出土している。縦方向の研磨痕がかすかに残るが、丁寧な造作がなされている優品である。胴下半部に1ヶ所小孔を開けている。

この遺跡からは鹿角製品が多く出土しているのが特徴で、同じ時期に有力な古墳が築かれていない地域で営まれた重要な墓地である。5世紀後半に比定される。

⑤ 鳥羽山洞窟遺跡例(長野県上田市)(第4図-10)(関孝・永峯 2000)

古墳時代の葬所である。やはり鹿角製品が多く出土しているのが特徴である。

鳴鏑は、鳥羽山洞窟のV面の洞窟底線上の焼けた人骨や馬具・砥石・鉋などと共伴して単独出土したものであ

る。基本的に副葬品と考えられる。有段形で、体部は球形に近いイチジク形を呈するもので、底部は破損により不明である。2孔(目)が確認でき、想定で3孔(目)を有すると考えられる。有段部の平坦面には、茶褐色の付着物が確認できるが、鉄鏃かどうかは不明である。

この遺跡からは、古式の馬具・須恵器などの朝鮮半島系の遺物の出土が認められる。5世紀中頃に比定される。

⑥ 七廻り鏡塚古墳例(栃木県栃木市)(第4図-3~7)(大和久1974)

径約28mの円墳で、舟形木棺と組合木棺が出土している。舟形木棺中より、玉纏大刀・弓・鉄鏃・鞍・鉾・轡などとともに残片1個を含む計6個の鳴鏑が出土した。鉄鏃とは被葬者を挟んで正反対の位置から、6点中3点は矢先に装着されている。いずれも木製で、ヤマグワである。肩部に張りのある無段形で、肩部最大径より上の頂部寄りに3孔(目)開けている。頂部は平坦面を形成する。

篋は木製と竹製の2種がある。木製篋(第4図-3)は、一段高い造りだしをつけて、ソケット状に鳴鏑に装着している。竹製篋との接合はどのようにしたのか、木製篋が途中で折れているので不明である。竹製篋(第4図-4・5)は、鏑に直接竹製篋を装着するものである。ただし、(第4図-4・7)は、鏑の下に一段低い造りだしがある。篋の先端に鳴鏑を装着させていることが分かる重要な資料である。この古墳からは、玉纏大刀・弓・矢・鞍などの武器と、轡・心葉形杏葉などが出土している。6世紀前半に比定される。

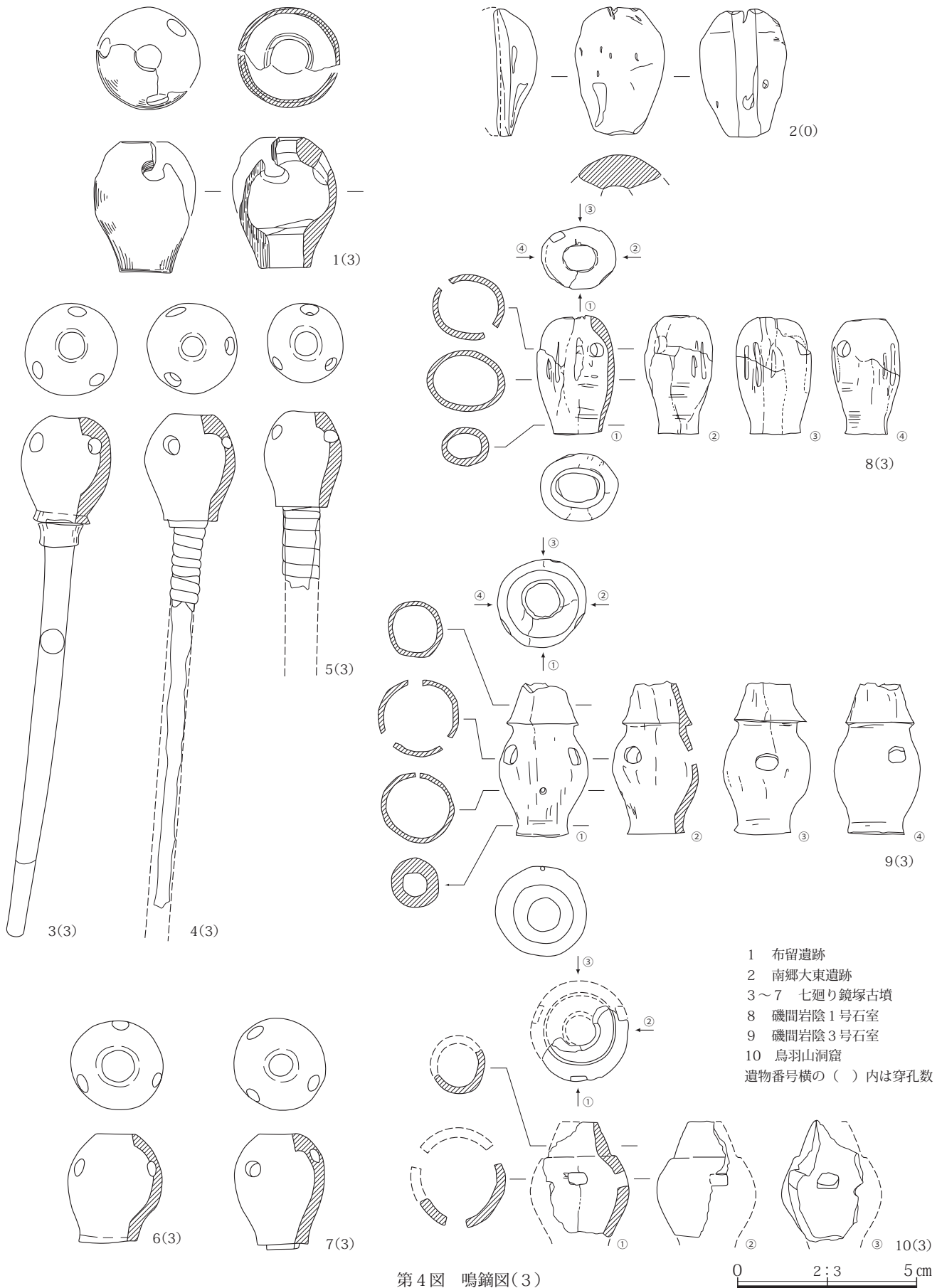
⑦ 山王遺跡例(宮城県多賀城市)(第5図-3)(後藤秀・村田 2001)

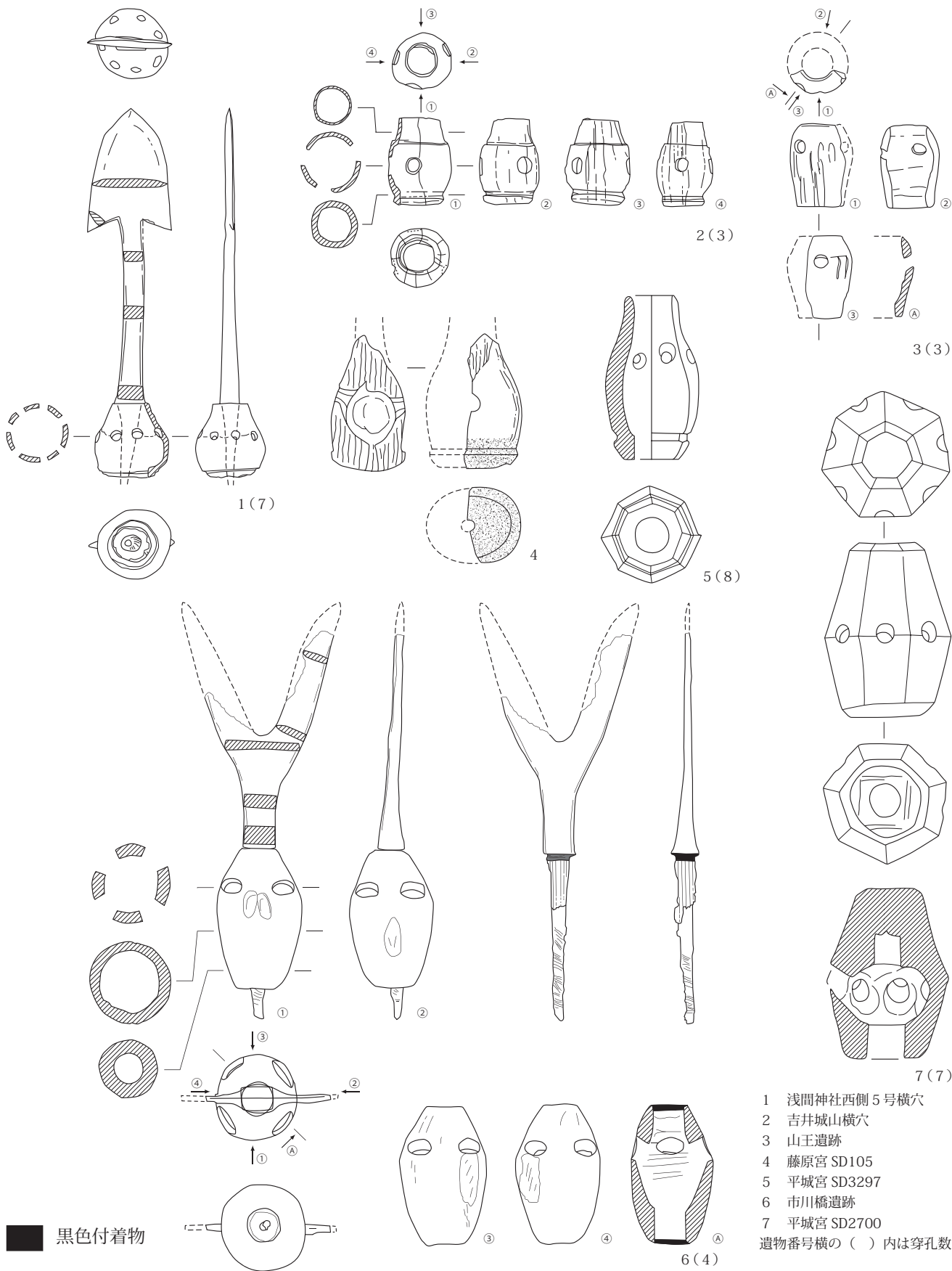
SD2050B河川跡の堆積層より出土した鳴鏑である。大量の木器・木材や、鹿角製品・ト骨などとともに出土している。肩部に張りのある無段の小型の鳴鏑で1/3が遺存する。孔は3孔(目)と推定される。表面には一部顆粒の痕跡が残り、内面には横方向のケズリ痕跡が認められる。簡便な造りである。古墳時代後期に比定される。

⑧ 吉井城山横穴例(神奈川県横須賀市)(第5図-2)(赤星 1942)

平面方形で各辺ふくらみを有する3横穴が隣接して並んでいる。右端の横穴より、骨鏃3・銀象眼鏢・直刀片・長頸片刃鏃・長頸腸挟長三角形鏃数本とともに出土した。鳴鏑は、長頸片刃鏃と組み合せて出土したと想定されている貴重な例である。

鳴鏑は、完形であるが、縦方向の亀裂がかなり入っている。有段で、底部には溝を巡らしている。非常に薄手で厚みは0.15cmほどである。タテ方向のケズリの痕跡が一部認められる。3孔(目)を有する。この鳴鏑と共伴した鉄鏃については確認できなかった。7世紀代に比定される。





第5図 鳴鐃図(4)

⑨ 浅間神社西側5号横穴例(神奈川県大和市)(第5図-1)(渡辺・曾根1978)

浅間神社西側横穴群は計9基ある。5号横穴墓は西に開口する全長5m、奥壁幅2.4m、高さ1.7mの平面羽子板状の横穴である。5体の埋葬があり、奥壁沿いに、鳴鏑は少年の副葬品として、刀子とともに置かれていた。横穴群からは副葬品はある程度出土しているが、この横穴からは、この鳴鏑と刀子のみである。鳴鏑とセットとなる鉄鏃は、平根の短頸腸挟長三角形鏃(第5図-1)で、全長9.9cm、刃部長3.2cm、逆刺幅2.3cm、頸部は長めで、頸部長5.0cm、茎は短く、茎長1.9cmである。鏃の関下部に鳴鏑が装着されている。鏃の関下に装着されたのが明瞭に確認できる古墳時代の鳴鏑は今の所、この例のみである。

鳴鏑は、イチジク形の下部に小さな段の有るものだが、底部には一条の細い溝を有している。今までに無い7孔(目)を持つ。鏃との装着は、関に口縁部を当てる形で止めており、関と鳴鏑の口縁部との空隙部には何らかの詰め物をしているようだが、詰め物の材質は不明である。篋竹は遺存しておらず、篋との関係は不明であるが、中空の鳴鏑と茎の間に篋を差し込んだものと想定される。7世紀代と考えられる。

以上が古墳時代の鳴鏑の例だが、以下参考に奈良時代を中心とした古代の特に残りの良いものについて簡単に記す。

⑩ 市川橋遺跡例(宮城県多賀城市)(第5図-6)(佐久間・古川2001)

平安時代前半の河道跡より出土した、鏃とセットで装着されていたことが分かる良好な例である。鏃は雁股鏃で、鳴鏑は、肩部に膨らみを有するタイプで無段のものである。装着した状況で出土した後、現在は分かれているが、装着をしたポイントが今でも確認でき、装着の状況を再現できる。鏃の茎には糸巻が巻かれてその上から篋が鳴鏑とともに差し込まれたものと考えられる。さらに重要なのは、この鳴鏑で初めて明瞭に確認できたのだが、黒色物質が鳴鏑口縁部と底部の両方の端から明瞭に確認できたことである。この黒色物質が何かは自然科学分析を行わないと確認できないが、漆の可能性が高い。装着するときの接着剤的な役割を持って使用されたのではないかと想定している。古墳時代の浅間神社西側5号横穴墓例でも、鳴鏑の口縁部で、鏃関部との空隙に詰め込まれているように見えた物質も漆であった可能性を示唆するものと考えている。

この黒色物質は、法隆寺例の短頸飛燕形の鏃(第6図-8)に装着された、鳴鏑口縁部と底部の両方にも認められた。⁷⁾今後、鳴鏑と鏃・矢の装着法については検討をすすめる必要がある。

他に藤原宮S D105例(第5図-4)や、平城宮S D

3297例(第5図-5)・平城宮S D2700例(第5図-7)などを宮跡出土の鳴鏑ということで図のみ上げて置く。ここで注意したいのは、8世紀代に推定される(第5図-5・7)の平城宮の出土例がともに稜を持っていることで、奈良時代になるとこのような稜線を形成する鳴鏑が出現することが分かる。

法隆寺例(第6図-8)・正倉院例(第6図-1～7)・春日神社例(第6図-9・10)の鳴鏑も参考に図示した。いずれも、孔(目)の数が多く、4・5・6・8孔(目)までである。

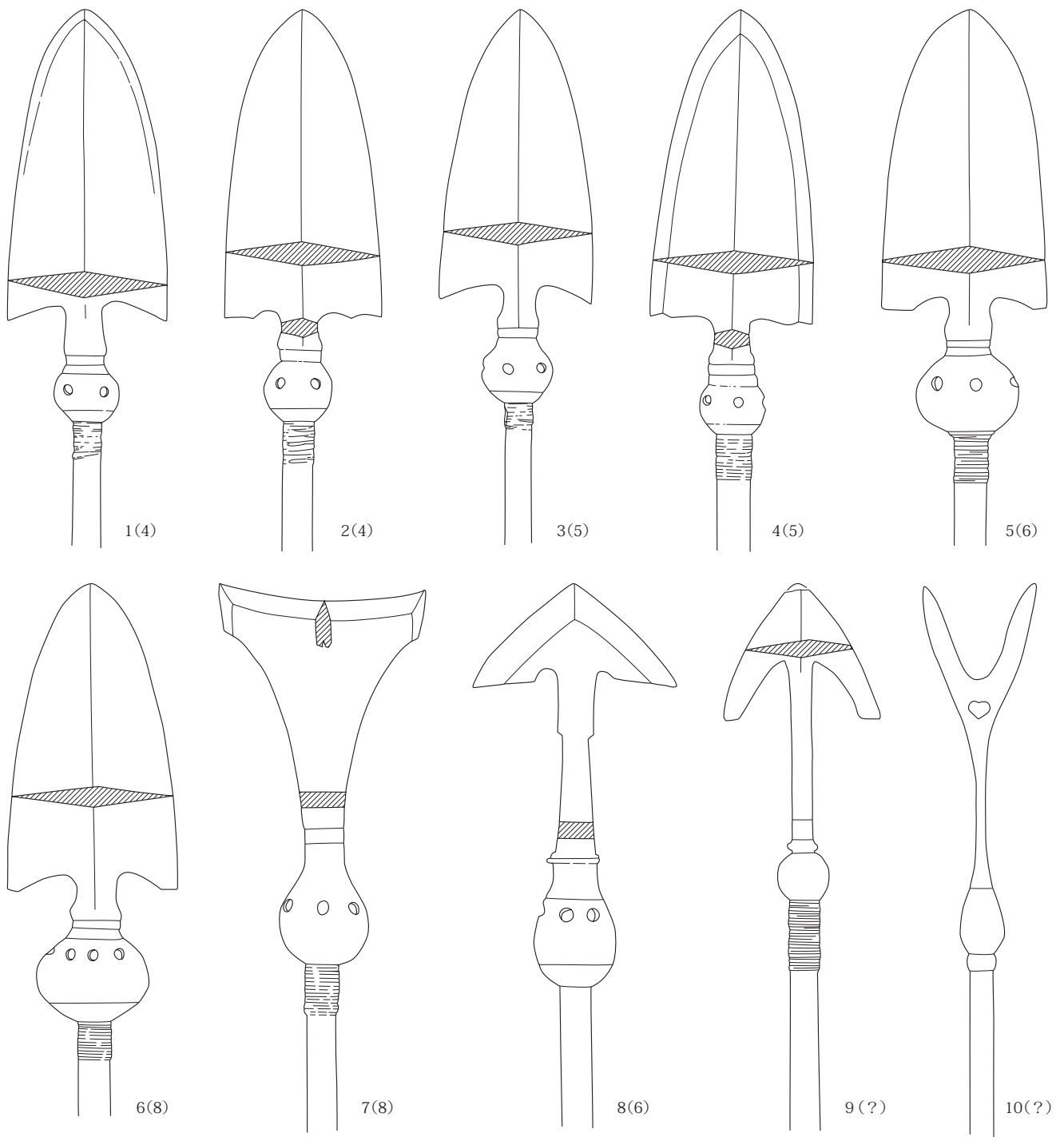
また大型浅腸挟長三角形(第6図-1～6)・鑿頭形(第6図-7)・飛燕形(第6図-8・9)・雁股形(第6図-10)などの特殊な大型平根の鏃と組み合わせられているのが分かる。正倉院では通常50本の征矢に1本の鏑矢の組み合わせで胡禄に入れられている。鳴鏑の用途を示すものであろう。

以上、鳴鏑について概観した。以上のことから分かったことを4つ上げてみる。

- ① 時期的には、5世紀中頃前半から出現する。
- ② 矢の先頭につく鳴鏑で篋との装着法が明瞭に分かるのは、七廻り鏡塚古墳例で、木製・竹製の篋の先頭に装着している。

鏃の関下に装着するのが明瞭に分かる鳴鏑は、浅間神社西側第5号横穴例で、鏑着して装着した状況のまま出土している。それと同じような形で吉井城山横穴例は、現在は分離しているが、出土状況から鏃の関下に装着している状況が推察できる例がある。それ以外古墳時代の例は、単独で出土しているもので、矢先に装着したものか、鏃とセットで関下に装着したものか不明であるが、鉄鏑などがほとんど残らない状況からすると、矢の先頭に装着していた可能性が高いのではないかと考える。鏃とセットで関下に装着した状況で出土するのは奈良時代以降の例では正倉院例を初めいくつもあり、さきほどの横穴出土例も含めて少なくとも7世紀以降には、基本的に鏃とセットで、関下に鳴鏑を装着することが多かったことを示している。反対にそれ以前の5～6世紀には、矢の先頭に鳴鏑を付けることのほうが多かったのではないかと想定する。ただし、確実な例が七廻り鏡塚例以外は出土していないので明言できない状況である。

- ③ 出土遺跡の種別は、古墳・横穴・岩陰墓・洞窟墓など墓が中心となる。墓以外の出土は、集落内の溝からの出土例が多い。有機質なので、普通の状況では腐朽してしまうが、土中に比べ腐朽しにくい石室に置かれていたり、有機質の残りやすい滞水地点などからの出土がほとんどで、かならずしも今遺存している例のみではなく、腐朽してしまい、現在は残っていないものもあることを考慮しておく必要がある。



1～7 正倉院 8 法隆寺 9・10 春日神社 縮尺は不詳 遺物番号横の()内は穿孔数

第6図 鳴鏑図(5)

④ 5世紀から6世紀代にかけては、朝鮮半島系遺物の共伴例が多く、半島との関わりが想定されるような古墳・遺跡からの出土が多い。

5. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の分布 (第7図)

古墳時代鹿角製鏃装具・鳴鏑の分布であるが、西は近畿地方から東は東北地方まで出土している。管見では、西端は和歌山県田辺市磯間岩陰遺跡で、東端は、宮城県

多賀城市山王遺跡である。今のところは東日本特に、関東地方に出土例が多い。ただし、漏れも多いと考えられ、分布域が今後広がる可能性は高い。特に現在、西日本の出土が少なく、今後の出土例の増加を待ちたい。⁸⁾

6. 鹿角製鏃装具・鳴鏑の編年 (第8図)

鹿角製鏃装具・鳴鏑について編年をしてみると、今のところ前期にさかのぼる例は認められない。現段階で最



第7図 古墳時代鹿角製・材質不明鍬装具、鳴鏑出土古墳・遺跡分布図

古例は内裏塚古墳例の5世紀中頃前半の鹿角製鳴鏑である。有段式のものが出土し、穴の開いていない鹿角製鍬装具の可能性のある製品もある。無段式も磯間岩陰1号石室より出土しており、有段・無段ともにこの時期には出土している。

5世紀後半も継続して、有段・無段のものが出土し、5世紀末～6世紀初頭になると鹿角製鍬装具が出現する。この時期に集中して出土する特異な例で、この時期以外からは今のところ出土していない。

6世紀前半には、矢先につけた鳴鏑の良好な例として七廻り鏡塚古墳例が出土している。6世紀後半の様子は資料が無くはっきりしない。7世紀に入ると、鍬と共伴する明瞭な例としての浅間神社西側5号横穴がある。同じく7世紀代の吉井城山横穴も、鍬との共伴が想定される遺物で、7世紀代になると鍬との共伴がはっきり分かる例が出てくる。この流れは、法隆寺例や、8世紀以降の市川橋遺跡例・正倉院例からもはっきりしており、鍬と共伴する例が多くなる。鳴鏑の穴の数は2孔(目)や3孔(目)が初めは多い。6世紀後半の状況がはっきりしないが、7世紀に入ると6孔(目)や7孔(目)のものが、

8世紀以降となると8孔(目)のものも出土し、年代が下るにつれ孔数が増えていく傾向にある。また、奈良時代の例をみると、稜線を以て縦方向に区画するものが出てくるのも特徴である。

まとめ

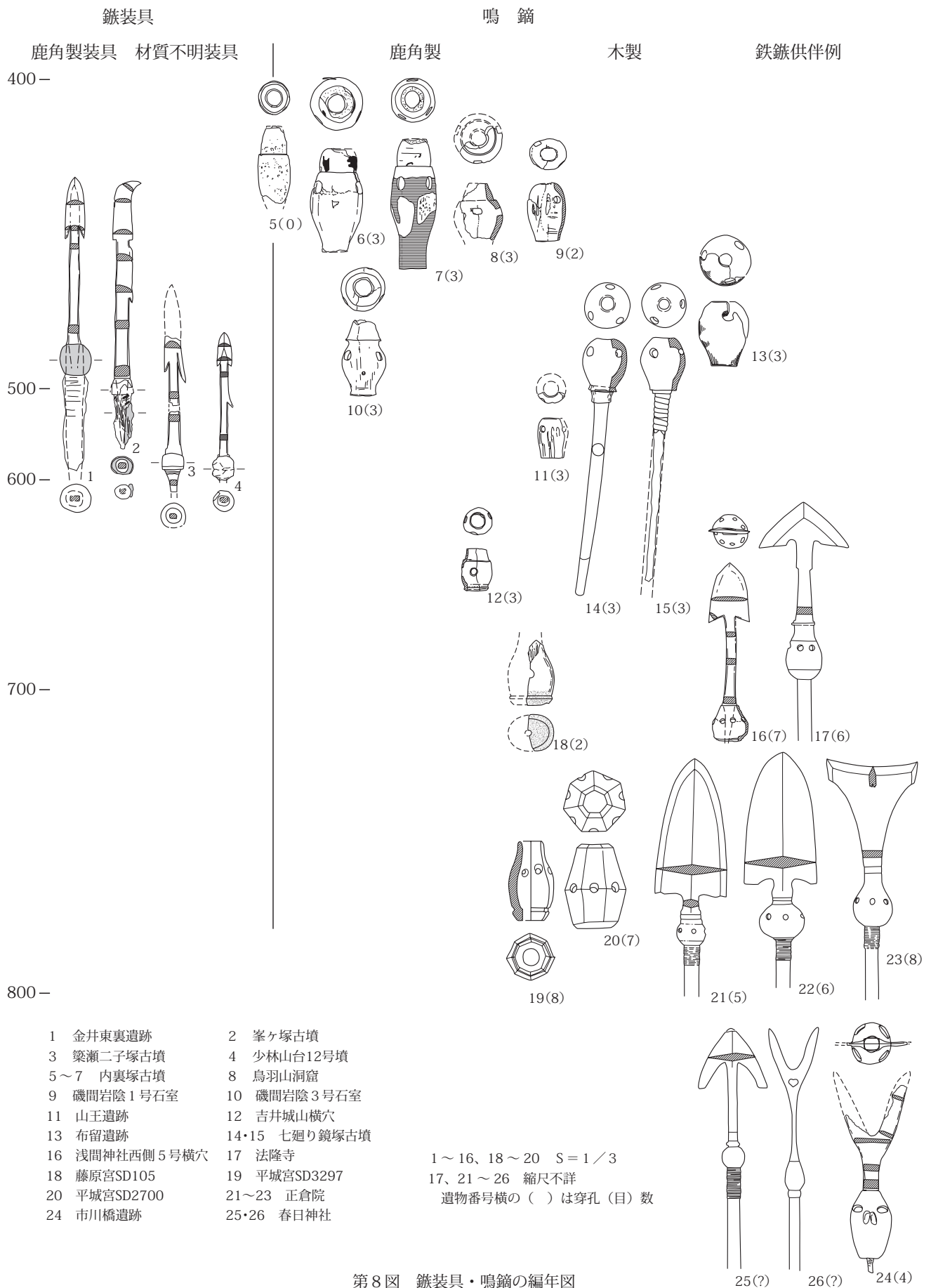
鹿角製鍬装具・鳴鏑について概略を述べた。その結果次の、5つの事項が分かってきた。

- ① 地域的には、現在までの所、近畿以東が中心であり、それも関東に多い。
- ② 年代的には今の所、前期に遡る例は無く、5世紀に入ってから出現する。鹿角製鍬装具は6世紀中頃以降には類例無く、鳴鏑は反対に7世紀以降に出土例が鍬とセットで装着されるものを中心に多くなる。
- ③ 5世紀代から6世紀にかけては、朝鮮半島系遺物の共伴例が多く、半島との関わりが想定されるような古墳・遺跡からの出土が多い。
- ④ 鹿角製鍬装具については、一部に直弧文を施すものがあり、在来の文化的要素を持っている。
- ⑤ 鹿角製鍬装具・鳴鏑ともに、出土数は極めて限られている。日本全体の矢数を考えれば、極めて少数である。また、共伴する矢・鍬の数に比べると、その出土数は少なく、ごく一部の特定の矢・鍬にのみ装着される場合がほとんどで、特殊な鍬であることが分かる。このことは、奈良時代にも継続していく。その中で金井東裏遺跡例は出土鍬のほとんどに鹿角製装具を付けており、異色である。

以上の5点が鹿角製鍬装具・鳴鏑に関して特色となる事項である。これらから分かることは、両者がともに、地域的・時期的・数量的に限定されている特殊なものであるということである。ただし、鳴鏑は6世紀以降も続けて外に向かって聞かせる矢として長く使用されたのに対し、鹿角製鍬装具は、外に向かって見せるための飾り矢の意味があったと考えられる矢に装着され、5世紀末から6世紀前半の一部の時期のみに使用されたもののすぐに消えてしまい、その存続期間はかなり短かったものと考えられる。

北東アジアが起源と想定され朝鮮半島にも出土例のある鳴鏑が日本に入ってくる際に、渡来人が何らかの役割を果たした可能性が想定される。金井東裏遺跡もそのような意味から、渡来人との関係について考えていく必要がある。ただし、鹿角製鍬装具については、峯ヶ塚古墳例に見られるように直弧文を施しており、在来の文化的要素を持っていることに注意しなければならない。

そのことは、金井東裏遺跡において、鹿角製鍬のすぐ南から出土した鹿角・銀装矛の鹿角装具に直弧文が施されていることなどからもうかがえる。これは、当時盛行した、鹿角装剣・刀子の鹿角装具に直弧文を施すことか



国内出土鹿角製鏃装具・鳴鏑データベース

No.	遺跡・古墳名	遺構名 (所蔵者名)	図版番号	所在地	時期	形式	材質	孔(目) 穿孔数	遺存度	長さ	最大径	厚み	口径(内 径)	底径(内 径)	孔(目) 径(内 径)	個数	鏃の有無・形	鏃法量	観察の有無	
1	金井東遺跡	31号溝	第1図- 1・2	群馬県渋川市金井	6世紀初頭	球形・円筒形	鹿角	無	良～不良	1.4～ 1.7	1.8	—	0.7～ 0.8	0.8～ 0.9	—	23+	短頸脇扶長三角形	全長11cm+, 刃部長3.5～4.2cm, 刃部厚0.2～0.3cm, 逆刺幅1.1～1.3cm, 頸部長6.4～6.8cm, 茎長1.5+cm	有	
2	峯ヶ塚古墳		第1図- 3	大阪府羽曳野市	5世紀末～ 6世紀初頭	—	鹿角	無	1/5残存	2.9+	0.9+	0.1+	0.8	0.8	—	1	長頸独立片逆刺反刃形	全長14.8cm, 刃部長3.3cm, 刃部厚0.3cm, 片逆刺長3.2cm, 頸部長7.8cm, 茎長3.7cm	有	
3	峯ヶ塚古墳		第1図- 4	大阪府羽曳野市	5世紀初頭	円筒形?	鹿角	無	1/4残存	1.8+	1.1+	0.1+	0.8	0.8	—	1	長頸独立片逆刺反刃形	全長11.7+cm, 刃部長0.6+cm, 刃部厚0.3cm, 片逆刺長2.3cm, 頸部長4.4cm, 茎長3.3cm	有	
4	峯ヶ塚古墳		第1図- 5	大阪府羽曳野市	5世紀末～ 6世紀初頭	球形?	鹿角	無	1/3残存	1.8+	1.2+	0.1～ 0.3+	—	0.8	—	1	長頸独立片逆刺反刃形?		有	
5	内裏塚古墳	(東大総合博物館)	第2図- 1	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	3	ほぼ完存	5.8	2.9	0.15～ 0.5	1.08	1.08	0.6	8.8	無		有	
6	内裏塚古墳	(東大総合博物館)	第3図- 5	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	無	4/5残存	4.3+	1.8	0.15～ 0.2	0.8	—	0.75+	(2.8)	無		有	
7	内裏塚古墳	(稲山氏)	第2図- 2	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	3	3/5残存	7.4	2.6	0.2～ 0.5	0.81	0.83	0.75～ 0.8	12.2	無		有	
8	内裏塚古墳	(稲山氏)	第3図- 4	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	3の可 能性	1/4残存	6.5	(3.1)	0.3～ 0.55	—	—	0.7+	11.0	無		有	
9	内裏塚古墳	(稲山氏)	第3図- 3	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	3の可 能性	1/8残存	4.2+	(2.6)	0.24～ 0.32	—	(0.8)	—	(1.6)	無		有	
10	内裏塚古墳	(飯野神社)	第3図- 1	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	3	ほぼ完存	5.93	2.99	0.24 ～0.44	2.99	0.57	0.6	0.67	1	無		無
11	内裏塚古墳	(飯野神社)	第3図- 2	千葉県富津市	5世紀中頃 前半	有段形	鹿角	3	ほぼ完存	5.90	2.75	0.29～ 0.51	2.75	0.64	0.6	0.56	1	無		無
12	南郷大東遺跡	SXO1	第4図- 2	奈良県御所市	5世紀後半	無段形	木	無	1/2残存	3.5	2.3+	0.2～ 0.9	0.6	0.6	—	1	無		無	
13	布留遺跡	東地区流路上層	第4図- 1	奈良県天理市	5世紀後半 ～6世紀	無段形	木	3	1/2残存	3.6	3.80	0.2～ 0.5	0.7	1.1	0.6	—	1	無		無
14	磯間岩陰石室墓	1号石室	第4図- 8	和歌山県田辺市	5世紀後半	無段形	鹿角	2	完存	3.2	2.1	0.15	0.9	1.1	0.4	4.5	1	無		有
15	磯間岩陰石室墓	3号石室	第4図- 9	和歌山県田辺市	5世紀後半	有段形	鹿角	3	完存	4.2	2.4	0.1～ 0.3	0.9	1.05	0.4～ 0.45	7.3	1	無		有
16	鳥羽山洞窟遺跡	墓	第4図- 10	長野県上田市	5世紀中頃	有段形	鹿角	3?	1/3残存	3.2+	2.6+	0.1～ 0.3	—	—	(2.7)	1	無		有	
17	七廻り鏡塚古墳		第4図- 3	栃木県栃木市	6世紀前半	有段形	木	3	完存	3.0	2.44	0.3～ 0.5	0.73	0.8	0.42～ 0.55	—	1	無		無
19	七廻り鏡塚古墳		第4図- 4	栃木県栃木市	6世紀前半	有段形	木	3	完存	3.0	2.50	0.25～ 0.55	0.6	1.2	0.51～ 0.59	—	1	無		無
20	七廻り鏡塚古墳		第4図- 5	栃木県栃木市	6世紀前半	無段形	木	3	完存	2.7	2.15	0.25～ 0.45	0.64	1.2	0.41～ 0.55	—	1	無		無
18	七廻り鏡塚古墳		第4図- 6	栃木県栃木市	6世紀前半	無段形	木	3	完存	3.0	2.65	0.2～ 0.35	0.9	1.3	0.42～ 0.51	—	1	無		無
21	七廻り鏡塚古墳		第4図- 7	栃木県栃木市	6世紀前半	有段形	木	3	完存	3.2	2.50	0.3～ 0.45	0.61	1.0	0.47～ 0.60	—	1	無		無
22	山王遺跡	SD20508	第5図- 3	宮城県多賀城市	古墳時代後期	無段形	鹿角	(3)	1/3残存	2.2	1.5+	0.03～ 0.2	(0.8)	(0.95)	0.32	(1.5)	1	無		有
23	吉井城山横穴墓		第5図- 2	神奈川県横須賀市	7世紀	有段形	鹿角	2以上	完存	2.3	1.7	0.08～ 0.1	0.9	1	0.3～ 0.4	2.5	1	有? (長頸片刃鏃)		有
24	浅間神社西側5号横穴墓		第5図- 1	神奈川県大和市	7世紀	有段形	鹿角	7	ほぼ完存	径	2.0	0.2	0.8	1.1	0.20～ 0.25	—	1	平根短頸脇扶三角形鏃	全長8.9cm, 刃部長3.2cm, 刃部厚0.2cm, 逆刺幅2.3cm, 頸部長1.9cm, 茎長1.9cm, 重さ14g	有
25	市川橋遺跡	SD5055	第5図- 6	宮城県多賀城市	平安時代前半	無段形	鹿角	4	完存	3.8	2.2	0.08～ 0.5	0.8	0.9	0.5～ 0.7	8.8	1	雁股鏃	全長10.6+cm, 刃部長6.1cm+, 刃部厚0.3～0.1cm, 逆刺幅(4.4)cm, 頸部長1.8cm, 茎長4.5cm, 重さ9.5g	有

らも分かるように、在来の文化的要素である。鹿角装鍬は、日本独自の要素を保持しているものと考えられる。また、前述したように、金井東裏遺跡例が、限られた特定の鍬に数本装着するという通常他の例に見られるような形をとらず、出土したほとんど全ての鍬に鹿角製装具を付けていることは、この鹿角装矢を使用して行おうとした行動の重要性を意味しているものと想定される。

今回は、日本以外の朝鮮半島や北東アジアの資料についてはほとんど触れることができなかった。今後はそれらの地域も含めた鹿角製鍬装具・鳴鏑の検討を行っていききたい。

お世話になった人々・機関(敬称略・順不同)

稲葉佳代子・上野祥史・内川隆志・内山敏行・小笠原清忠・小野崎紀男・尾見智志・小山友孝・岸本直文・金武重・杉井健・杉山今朝吉・相山林継・鈴木一有・高田貫太・高野学・千葉毅・手塚均・中川貴・中田晃梶・新納泉・西村鋼児・根井考治・箱崎淳・橋本達也・坂靖・日高慎・深澤敦仁・藤沢敦・古川一明・松木武彦・右島和夫・横須賀倫達・吉澤則男・若狭徹

上田市立博物館・神奈川県立歴史博物館・國學院大學博物館・田辺市教育委員会・つる舞の里歴史資料館・東京大学総合研究博物館・羽曳野市教育委員会・文化庁・大和市教育委員会

註

- 1) 鍬装具が、鹿角製かあるいは骨製の判断は、動物考古学等の専門家に正式に調査してもらっていないので、確実とは言えない。ただし、今までの、鳴鏑等の類例を見る限り、鹿角製の可能性が高いと判断し、記述した。そのため、今後の専門家の調査により鹿角製ではなくなる可能性があることを記しておきたい。それでも、同じ性質を持つ骨角製品を使用するという点での鍬装具の意義は変わらない。
- 2) 鍬装具が無孔の鳴鏑である可能性はある。この問題については金武重氏より指摘を受けており、今後半島の類例を検討することで、明らかにしていくつもりである。
- 3) 鳴鏑の部分名称については、小笠原流宗家(小笠原清忠氏)・小野崎紀男氏よりご教示を得たが、音を出すための小孔を目(め)と呼称する以外は、鏑の溝の部分の名称について特定するものがあるので、各部位の特定の固有名称はほとんど無かったようである。そこで、各部位には任意に名称を付けた。ただ、音を出すための孔を表現する際には、孔(目)という形で目という表現もするというを示すことにする。
- 4) 金井東裏遺跡を火砕流で覆った、榛名二ツ岳渋川テフラ(H r - F A)について、最近その実年代を14Cのウィグルマッチング法による495年という年代が提示されている(早川・中村ほか2008)が、まだデータ数が少ないこともあり、従来の火山灰と須恵器の共伴関係から想定されている(坂口1998)6世紀初頭の年代を採用する。今後のデータの増加とその検証に基づき検討していくつもりである。
- 5) 意識的に、屈曲させた可能性についても考慮する必要がある。
- 6) 鳴鏑は、現在、飯野神社・東京大学総合博物館・相山林継氏の3ヶ所に分散所蔵しており、そのうちの一部について実地調査を行うことができた。
- 7) ガラスケース越しでしかも照明が暗い中での観察なのではっきりしたことは言えないが、やはり接着剤としての漆の可能性が高いと考える。四天王寺蔵の鑿頭鍬に装着された鳴鏑についてもガラスケース越しに観察したが確認できなかった。正倉院宝物については観察ができていない。

8) 最近、宮崎県島内139号地下式横穴より大量の武器・武具とともに鳴鏑が1個出土したことが発表された(橋本2015)。発掘したばかりの情報であり、今後の報告に期待したい。鳴鏑の最西端の例となる。

引用参考文献

- 青柳泰介 2003 『南郷遺跡群Ⅲ』 奈良県立橿原考古学研究所
飯塚誠・徳江秀夫 1993 『少林山台遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
赤星直忠 1942 「神奈川縣浦賀町沼田城山横穴に就て」『考古学雑誌』第32巻第4号 日本考古学会
江上波夫 1951 「鳴鏑考」『ユウラシア北方文化の研究』山川出版社
大和久震平 1974 『七廻り鏡塚古墳』 帝国地方行政学会
堅田直 1970 『田辺市磯間岩陰遺跡調査概要』 帝塚山大学考古学研究室
堅田直 1987 「田辺市磯間岩陰遺跡の概要と骨角器」『月刊 文化財』No.290 文化庁文化財部
後藤秀一・村田晃一 2001 『山王遺跡八幡地区の調査2』 宮城県教委・宮城県土木部
後藤守一 1939 「上古時代鉄鍬の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号 東京人類学会
後藤守一 1940 「正倉院御物矢」『人類学雑誌』第55巻第10号 東京人類学会
坂口一 1998 「集積遺構出土土器の検討」『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
佐久間光平・古川一明 2001 『市川橋遺跡の調査―県道『泉一塩釜線』関連調査報告書Ⅲ―』 宮城県教委・宮城県土木部
柴田常恵 1906 「上総君津郡飯野村内裏塚」『東京人類学会雑誌』第22巻第249号 東京人類学会
白井久美子 2002 「3 富津市内裏塚古墳出土遺物の調査」『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料』第1分冊 (財)千葉県史料研究財団
末永雅雄 1941 『日本上代の武器』 弘文社
末永雅雄 1981 『増補 日本上代の武器』 木耳社
杉山晋作 1975 「内裏塚古墳の再検討―内裏塚古墳の遺物―(前)」『史館』第5号 市川ジャーナル
杉山秀宏・桜岡正信ほか 2014 「群馬県渋川市金井東裏遺跡の発掘調査概要」『日本考古学』第38号 日本考古学協会
相山林継 1991 「内裏塚古墳出土の鳴鏑」『宇麻具多』第4号 木更津古代史の会
鈴木一有 2003 「後期古墳に副葬される特殊鉄鍬の系譜」『研究紀要』第10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
関孝一・永峰光一 2000 『鳥羽山洞窟～古墳時代葬所の素描と研究～』 信毎書籍出版センター
関義則 1991 「逆刺独立三角・柳葉形鉄鍬の消長とその意義」『埼玉考古学論集』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
大工原豊・志村哲ほか 2003 『梁瀬二子塚古墳 梁瀬首塚古墳』 安中市教育委員会
田中元浩 2008 「磯間岩陰遺跡の再検討」『岩陰と古墳―海辺に葬られた人々―』 和歌山県文化財センター
中川貴 2008 「田辺市の岩陰と古墳」『岩陰と古墳―海辺に葬られた人々―』 和歌山県文化財センター
奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録・近畿古代編』 奈良国立文化財研究所
橋本達也 2015 「えびの市島内139号地下式横穴墓調査速報」えびの市教育委員会
馬場一一郎・小川敬吉 1927 古蹟調査特別報告『梁山夫婦塚と其遺物』 朝鮮総督府
早川由起夫・中村賢太郎ほか 2008 「ウィグルマッチング法による榛名渋川噴火の年代決定(再検討)」『日本第四紀学会講演要旨集』38 日本第

四紀学会

山内紀嗣・置田雅昭 1995 『布留遺跡三島(里中)地区発掘調査報告書』
埋蔵文化財天理教調査団

吉澤則男・下山恵子 2002 『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』 羽曳野市教育委員会

渡辺勲・曾根博明 1978 『上野遺跡 浅間神社西側横穴群』 大和市教育委員会

図版出典

図1-1・2・8・9 群馬県埋文事業団にて実測、トレース

図1-3～5 羽曳野市教にて実測、トレース

図1-6・7・10～12 安中市教委にて実測、トレース

図2-1、図3-5 東京大学総合博物館にて実測、トレース

図2-2、図3-3・4 相山林継氏資料、国学院大学博物館にて実測、
トレース

図3-1・2 白井久美子 2002 よりトレース

図4-1 山内紀嗣・置田雅昭 1995よりトレース

図4-2 青柳泰介 2003よりトレース

図4-3～7 大和久震平1974よりトレース

図4-8・9 田辺市教委にて実測、トレース

図4-10 上田市立丸子郷土博物館にて実測、トレース

図5-1 大和市教委にて実測、トレース

図5-2 神奈川県立歴史博物館にて実測、トレース

図5-3・6 東北歴史博物館にて実測、トレース

図5-4・5・7 奈良国立文化財研究所 1985よりトレース

図6-1～10 後藤守一 1940 よりトレース